日本財団 The Nippon Foundation 助成事業

「笹川杯日本知識クイズ大会 2011」優勝者招聘

訪 日 感 想 文

公益財団法人日本科学協会

教育・研究図書有効活用プロジェクト室

ボートレース振興会 贈り物 このプロジェクトは競艇の交付金による日本財団の助成金を受けて実施しております。

目　次

吉林大学外国語学院副院長　周巽夫・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
吉林師範大学　日本語科４年生　魏越・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
吉林大学外国語学院日本語科４年生　王琳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
山東大学日本語学部３年　王芮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
山東大学日本語大学院１年　張笑笑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
貴州大学日本語学部４年　劉清・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
貴州大学日本語学部３年　張明偉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
貴州師範大学日本語学部２年　洪洋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
西南大学日本語学部４年　羅莉鴻・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
南京大学日本語学部４年　紀文心・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
東北財経大学日本語科４年生　金奉源・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
東北財経大学日本語科４年生　朴光・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
東北財経大学日本語科４年生　安太紅・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
瀋陽師範大学日本語科４年生　姜琳琳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
南京信息工程大学日本語学部４年　憑秀英・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
東華大学日本語学部３年　陳馳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
貴州大学外国語学院日本語学部４年　鄧嬋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
四川外国語学院日本語学部４年　賈紓婧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
東華大学日本語学科主任補佐　李薇・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
山東大学日本語学科教師　胡勇・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
東北財経大学国際商務外語学院日本語科教師　蒋云斗・・・・・・・・・・・・・・・・・23
貴州大学外国語学院日本語学部教師　李麗・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

※原文が中国語の声は、原文に忠実に和訳して掲載しました。
原文が日本語の声は、原文を尊重して手を加えず掲載しました。
一部個人名をアルファベット表記にしました。

アユの塩焼きから「知る」まで

吉林大学外国語学院副院長　周異夫

大阪の送別会で、アユの塩焼きが運ばれた。昔、一度山の中で天然のアユが出されたことはある。そのアユは小さくて、骨まで全部食べたが、多くの場合は、出されるものが養殖のもので、そのたびに骨に煩わされる。その際、自分も周りの日本人もみんな根気よく細い骨を取り出しながら魚肉を食べていた。ゆっくり骨を取りながら食べることが常識になっていたが、「日本知識クイズ大会」優勝者訪日団の送別に、東京から大阪に来られた大島美恵子日本科学協会会長がアユの骨の取り方をみんなに見せた。

一行のほとんどはアユの塩焼きが初めてで、別に深く考えもせずに、ただ面白がりながらそのまねをした。みんなは一本の骨がすっぽり抜ける風景を楽しんでいて、喝采の声が耳に絶えなかった。

そのやりかたは料亭の仲居さんが教えてくれたという。さすが！と思わず感嘆の言葉を口にした。知っているつもりのことだが、本当はまだ知らないところが多いのではないか、と一瞬に思った。

中国では、ここ十数年来、日本語学習者が大幅に増え、日本のこともかなり知っていると自慢している人も少なくない。しかし、本当に日本のことを知っていると言えるだろうか。

中国と日本は 2000 年以上の交流の歴史がある。友好交流の舞台で活躍するのは相手のことをよく知っている人たちであった。友好関係を築く前提は相互理解であり、両国の将来の友好交流の担い手は互いのことをよく理解する青年たちであろう。理解は、まず「知る」ことが必要である。中国の青年の場合は、日本の歴史、文化、社会など、いろいろなことを「知る」必要がある。大学で「日本事情」「日本文化」などの科目で日本のことを勉強しているはずだが、真に「知る」にはまだ道は遠い。「日本知識クイズ大会」に参加することが、中国大学生の日本のことを「知る」意欲をさらに強いものにしたと言うなら、実際に日本を訪問し、日本の大学生や市民と直接に交流することは、そのために真に「知る」道を開いたと言えよう。

本の中から知っている日本は表面的で断片的なものが多く、静的なものがほとんどであるが、自分が実際にその中に入って得たイメージは連続的で、動的なものが多い。一回の訪問でたくさん知ることはできないが、いくつかのことについて本当にわかれば意義があると言える。

「万巻の書を読み、万里の道を行く」という古訓がある。書籍から得た知識を実際に検証し、生きているものにすべきだということを言っている。訪問団の学生たちが今回の日本訪問をきっかけに、真に日本のことを「知る」人になり、識者が唱えた「知日派」の中の一員になり、中国と日本の友好交流のために大いに貢献することを強く期待しているのである。

やらずに悔やむよりやって悔やむ（原文日本語）

吉林師範大学　日本語科 4 年生　魏越

夢を追い続ける決心ができたのは今回の笹川杯日本クイズ大会に参加し、八日間日本訪問したことを通じで一番得たことです。

私は2009年の9月から2010年8月までクラスの一位として選ばれて札幌国際大学に留学していました。留学中、積極的に日本人と交流し、いろいろなボランティア活動にも参加し、日本語が上達になった上、日本文化への理解もより深くなってきました。特に日本人の他人への思いやり、日本サービス業のお持て成しについてとても感心しました。必ず日本に戻りたいと思っていました。

しかし、帰国後、ちょっとカルチャーショックというものがあって、周りにも必ずいい企業に入ると大きく期待されて、私は就職するか、また日本に戻って進学するかという問題を巡ってずっと悩んで、長い間自分を見失ってしまいました。一瞬目標が見えなくなって、夢というのも心の奥の底に沈んでしまいました。何事してもやる気が出ませんでした。自己嫌悪というのもありました。しかし、そんな私でも先生に信用され、リーダーとして笹川杯日本クイズ大会に参加させていただきました。準備中、日本のあらゆる場面について勉強し、自分はどれだけ日本が好きなのか改めて感じました。そして、運がよくて個人戦の一位となりました。その副賞として、八日間日本訪問することになりました。

再び日本の地に立った瞬間、懐かしい雰囲気を感じたときに、日本での画面は一つ一つ目の前に現し、私はやはりここに戻りたいと思いました。日本科学協会の皆様のおかげで、想像にもしないことを体験させていただきました。東京で江戸博物館に見学に行って、賑やかな東京の裏の静かさを感じました。沖縄で自然の美しさに感動され、これからもっと自然を大切にしないと認識しました。京都で世界遺産の金閣寺と清水寺を見学して日本の古典美を感じ取りました。大阪で大都市の賑やかさと便利さを感じました。そして、何人のすばらしいガイドさんの説明で各地域の歴史、文化、名所名物についてもよく知ることができました。今回の旅で、日本のことをもっと知ることができました。そして、何よりまた日本に戻って夢を追い続ける決心ができました。

幼いときから立派な通訳者になるのは私の夢です。日本語を勉強してから、ずっと中日親善友好の架け橋になれる通訳者を目指しています。東京外国語大学の大学院の通訳専攻は今の目標です。合格できるかどうか不安でいっぱいですが、日本の方にやらずに悔やむよりやって悔やむという言葉をいただきました。今の私はもうすでに楽になって、結果を問わず、10月の試験でがんばってみたいと決めました。

日本科学協会の皆様、夢と自身を取り戻せる旅をさせていただいて本当にありがとうございました。

学習の旅　成長の旅（原文中国語）

－「笹川杯日本知識クイズ大会」優勝者訪日旅行の感想－

吉林大学外国語学院日本語科4年生　王琳

あっという間に、八日間の日本への旅は気付かぬうち終わってしまった。八日間の192時間は実際に長いものではなかったが、その間の一分一秒に経験したこと、身につけたこと、学んだことは、いずれもこれからの長い人生に大きな影響を及ぼすだろうと思う。

今回の旅行は私にとって初めてのことだらけだった－両親や友人とではなく一面識もない人達との初めての旅行、初めての国外旅行、初めての本物の日本料理…一秒一秒が新鮮さに満ち、感動してやまなかった。

東京、大阪、京都、沖縄。どの地名も数え切れないほど本で目にしてきた。しかし、実際にその土地に足を踏み入れ、そこの空気を吸って、そこの風景を見た時、実は何も知らなかったのだと感じた。人の群れが流れていく街を歩いて初めて、銀座がどれほどにぎわっているのかを知った。自分の口で食べてみてこそ、浅草の人形焼きがどれほど美味しいか分かる。その足元から仰ぎ見て初めて、東京タワーの高さと美しさを知った。茶道の師匠が点てたお茶を頂いて初めて、心の静かさと苦さと甘さの調和が分かった。街の若者が話している

のを自分の耳で聞いて、関西が持つ明るさと暑さをより理解できた。天神祭の時に心斎橋を歩いてみて、浴衣を着た日本の女の子がやはりテレビで見るのと同じように美しいのだと気づいた。華麗で荘厳な金閣寺を自分の目で見てこそ、北山時代の物質文明と文化の発達を肌で味わうことができた。本当に欄干にもたれて下をのぞき込んだからこそ、清水の舞台から飛び降りるのにどれほどの決意と勇気が要るのか感じることができた。沖縄の海に駈け入ったからこそ、海水の清らかさ、砂の柔らかさ、空の青さがこれほどのものだと分かった。店員が笑顔で「めんそーれー」と挨拶してきてやっと、沖縄の方言が標準語とこれほども違うということを理解できた。首里城に立って全体を見回した時、ある王朝の栄枯盛衰を目撃したかのようだった。元は試験に出るからと丸暗記してきた人名、地名、歴史上の事件が、本当に日本を訪れてみると、改めて輝きを放ちだし、いきいきとしたものに変わったのだ。この経験で、授業中に先生から聞いた話を思い出した。本から学べるものは生きていない。実際に見て触れて触らないと、本当の理解はできないのだと。

日本の旅で深く印象に残ったことがいくつかある。

一つ目は、沖縄でハーリーに参加したこと。私は小さい頃から度胸がなく、泳げないし船に乗るのも怖かった。船がちょっと揺れただけでひどく驚き、心臓が飛び出すかと思った。悲鳴を上げたくとも声が出なかった。前に家族や友人と遊びに行った時、一緒に船を漕ごうと誘われても、私は首も手も振って逃げ出すばかりだった。それが今回は、逃げもせず縮こまりもせず、みんなと一緒に大会に参加したのだ。前の晩にはずっと寝付けず何度も寝返りを打っていたのだが。船の漕ぎ方を覚えられなかったらどうしよう、遅くてみんなの足を引っ張ってしまったらどうしよう、細長い爬竜船は転覆したりしないだろうか…しかし、みんなも爬竜船を漕ぐのは初めてだ。自分ができるかどうかはやってみないと分からないし、試してみないと可能性はない。試さなかったら進歩する機会は永久にない、とまで考えて、勇気を奮い起こしたのだった。先生が辛抱強く丁寧に説明してくださり、みんなが一致団結して努力した結果、大会を無事に終えることができた。しかもチームは第二位に！ゴールに到着すると、みんなは思わず櫂を掲げて高い声で歓呼しだした。あの瞬間の喜びと感動は沖縄の日差しよりも熱かった。

二つ目は、茶道体験イベントで先生が説明された「一期一会」の意味。今回の旅行を経て、その言葉の深い意味をより深く理解することができた。和やかで親しみやすい尾形理事長、大島会長、Ａ先生、随行してくれたＢさん、Ｃさん、親切で辛抱強いガイドと運転手の皆さん、東京案内をしてくれた日本の大学生達、海辺で焼き肉をご一緒した豊見城市民の皆さん、面白くて能弁なたこ焼き屋のご主人。最も重要なのは、違う街の違う大学から来た、「笹川杯」日本知識クイズ大会で知り合った先生達と学生達。皆さんがいたからこそ、今回の旅行はここまで充実した多彩なものになったのだ。お互いが人生の旅人の一人に過ぎず、これからまた会う機会はないかもしれない。それでも、すばらしい時間を共に過ごしたのだから、皆さんの顔立ちはしっかりと覚えているだろう。一期一会、出会いは縁。

最後にとても強く感じたものは、実はみんなの優れた日本語能力だった。大学三年生の終わりに大学院へ推薦されたのを知ってから、私は徐々にだらけてしまい、日本語の聞き取りや会話を練習しなくなった。本を読んだり単語を覚えたりすることもなくなり、日々を何となく過ごしてしまって、日本語のレベルがかなり下がっていた。いつも人の言っていることが分からず、自分の意思もはっきり伝えられないので、日本人と会話するのをできるだけ避けるしかなかった。彼らと交流して互いに理解したいと内心では思っていたのにである。しかし、みんなは日本人と何も支障なく交流し、喋り合って笑いあっていた。尊敬と羨ましさで心がいっぱいになり、自分の日本語レベルがまだまだだと深く感じた。ずっと劣っており、学ばねばならないことがあまりにもたくさんある。今回の旅行は私にとって学習面での警鐘だった。努力しないと成績はついてこない。また以前のようにだらけてしまったら、結果は想像に耐えない。今後の学習においてより努力し、また読書するだけではなく、たくさん実践していきたいと思う。

短い旅行の間に、授業では学びようのないことをたくさん学習した。この旅行がもたらしたものは楽しさなどという簡単なものにとどまらず、人生の意義について考える機会やそれまでの態度の反省のほうが重要だったと思う。「笹川杯日本知識クイズ大会」のおかげでこうした得がたい機会を頂けたこと、この旅行で学び、反省し、成長できたことに感謝したい。

忘れられない旅（原文日本語）

山東大学日本語学部３年　王芮

あっという間というか、昨日の夜は大阪の心斎橋で大阪の名物のたこ焼きをゆっくり味わっていたが、今回の訪日の感想を綴っているこの時、私はすでに日本と数千キロメートル以上隔たった中国の内陸地方にある故郷に戻った。感想と言っても、本当に思い出いっぱいで、万感胸に迫るという気がする。どこから書き始めるか分からないけど、とりあえず、今回の訪日を振り返ってみよう。

山東大学の代表チームの一人として、笹川杯日本知識クイズ大会に参戦し、しかも、手強い数チームから勝ち抜いて華東地域の優勝校として日本科学協会に招聘され、訪日が実現できるとは全然思っていなかった。すべては夢を見るようだった。スケジュールがいっぱいで、７月１９日に成田空港に到着した時から、７月２６日に関西空港から帰国したまで、この七日間、見たいことをゆっくり見て、行きたいところに行って、買いたいものを思う存分買って、それと同時に、地元の日本人大学生との交流を行って、日本科学協会や日本財団の主催による歓迎会においてたくさんの方々と名刺交換をして、会話を交わして、本当に勉強になった。また、沖縄で、美しい海を楽しみながら、訪日団の皆様と一心同体になってハーリー大会に参加して、素晴らしい思い出を心に残した。言いたいことが言葉に言いつくせないほどあって、私にとって、今回の訪日が一生忘れられない旅となった。

日本語の勉強を開始してから、三年ぐらい経った。日本語の勉強を通じて、日本という国を知ることを目指している私にとって、実際に日本を訪れることはなによりの勉強だ。教科書で見たことを身を持ってこの目で見て確かめることによって、理解や記憶がさらに深くなる。この意味において、今回を含む日本科学協会の招聘によるこれまでの訪日はとても意味のある事業で、中国の若者に日本を知る絶好なチャンスを提供する日中交流の橋架けと言っても過言ではない。実は、今回、日本に来る前に、少し心配していた。周知のように、今年の３月１１日に東北地方で大きな地震が発生し、大津波はなにもかも呑み込んで、莫大な被害をもたらした。震災後、今になっても完全に収束していない原発の問題が日本に影響を及ぼしている。この状況においての訪日は本当にいいだろうか、日本の人々にとって迷惑ではないかと心配していた。しかし、今回、訪日の間、日本科学協会の皆様を始めとする方々にいろいろと面倒が見られて、本当に感心した。ここで、日本科学協会のスタッフを始めとする今回の訪日に尽力してくださった皆様に心より感謝の意を表したいと思う。これからも、皆様のご期待にこたえるよう、頑張っていきたいと決心する。

今回の訪日を通じて、痛感したことがいくつかある。国内の日本語教育は日本の実情とある方面においてすこしズレがあるのではないかという気がする。日本ですでに使われていない言葉が国内の日本語教科書に出たり、とくに、クイズ大会に参戦した時、最新の日本の時事が質問となって、答えられない場合がよくあった。たぶん、これも私たち日本語を専門とする人々の責任の一つではないかと思う。というのは、日本語が分かる私たちは日本の最新の実情を周りの人々に伝えて、周りの人々に日本のことを知ってもらうことができるからだ。これも今回の訪日の一つの目的かもしれない。震災後の日本は今どうなっているのか、日本の国民は今どのような生活を送っているのかを身を持って見たり聞いたりして、帰国後、クラスメートにそれをチャンと伝えることを果たてほしいと私たちが期待されているに決まっている。だから、これを自分の仕事としてしっか

りやっていきたいと思う。

もう一つ言わざるをえないことがある。沖縄のひめゆりの塔を見学することができて、戦争に対する理解が一層深くなった。終戦後６６年も経った今、戦争を経験したことがない私たちのこの世代は戦争のことを自意識することなく忘れようとしている。ひめゆりの塔の平和記念資料館で、当時の人々の証言の記録を読んで。戦争がいかに残酷のことなのかを痛感した。亡くなられた人はどの国の人であろうとただ一つしかない大切な命が失われたら、もうお終いだから、戦争が二度と起こらないように、心より祈っている。

最後、今回の訪日を通じて、日本という国に対して、私が知らないとこがまだたくさんあると分かった。世界中、一番安全で住みやすい国と言われる日本はその社会の仕組みがどうなっているのか、終戦後その経済がどのように復興して、世界有数の経済大国に成長してきたのか、平均寿命が長く少子高齢化が深刻に進んでいることにどう対応するのかなどについて、知らないこと、あるいは知りたいことがまだいっぱいある。だから、知日派を目指して、周りの人々に日本のことをできるだけ伝えて、知ってもらうことを目標に、頑張っていく所存だ。そして、震災に見舞われた東北地域に行くことができなくて、残念だけど、被災地域や被災者が一日もはやく復興することを心より願っている。

末筆ながら、今回の訪日のチャンツを提供してくださった日本科学協会のおかげで、たくさんの方々と知り合って、その中、素晴らしい友たちが何人もできたことをとても嬉しく思っている。この意味においても、もう一度、日本財団や日本科学協会のスタッフを含む今回の訪日に尽力してくださった皆様に「本当にありがとうございました」とこの上ない感謝の意を表させていただきたい。皆様との再会を期待していながら、ご健康とご幸福を心より願っている。

一生の宝物（原文中国語）

山東大学日本語大学院１年　張笑笑

笹川杯日本知識クイズ大会の受賞者として、8 日間の日本訪問をする機会に恵まれた。わずか八日間だったが、主催者が心を込めて手配してくれて、東京と大阪で現代都市の賑わいを味わい、沖縄で南国の風情を体験し、京都の歴史の重みを鑑賞することができ、より全面的に、立体的に日本を捉えることができた。

7 月 19 日の夕方、雨の成田空港に着陸し、日本旅行が正式に始まった。バスの窓から美しい東京タワーが見えると、旅の疲れもふっと消え、心が興奮と満足でいっぱいになった。翌日は日本の大学生達に親切なガイドをしてもらいながら東京見学。湯島聖堂、神田明神、お台場、秋葉原。かつて本やテレビで見ていた名前が目の前で本物の風景になった。湯島聖堂、神田明神の歴史感とお台場、秋葉原の現代感がこもごも入り交じって、東京の２つの側面を知ることができた。

その日だけでたくさんの神社を見学したが、共通した特徴は、いずれも都心の摩天楼の間に建っていたことである。こうした光景は中国ではおよそ見られない。しかし、東京だけでなく、どこの街でも、どれほど現代的でにぎわっている場所でも、少し歩けば神社が目に入った。車が流れゆくコンクリートジャングルの中ひっそりと佇んでいても、あまり違和感はなかった。現代と古典とが不思議にも調和して共存していたのだ。神社に立ち入ると、都市の喧噪が本当に消えたかのように、気持ちがすっと静まった。こうした神社の存在は、ストレスに満ちて多忙な都市の人々がちょっと足を止め、リラックスする心の避難港なのかもしれない。

日本の大学生と交流する中で深く印象に残ったのは、彼らのまじめさと落ち着きだった。短時間により多くのスポットを見学させようと、彼らは労苦を厭わずいちいち地図を調べ、適切な行程を決めてくれた。迷宮のような東京で、もし彼らが連れて歩いてくれなかったら、私達はすぐ迷子になっていただろう。学生のほとん

どは私達より年下だったが、大人で落ち着いているように見えた。

東京で最後の夜、私達は再びお台場を訪れ、うつくしい夜景を鑑賞した。節電のため、かの有名なレインボーブリッジがライトアップされておらず、少し残念だった。しかしよく考えてみるとこれもまた別の美しさである。強く勇敢な日本人が、自らの力でできることを通じて、心を合わせて目の前の難関に立ち向かっているのだ。レインボーブリッジが再びライトアップされる日はきっと近いと思う。

東京での日程を終え、私達が訪れたのは日本の最南端、沖縄である。飛行機を降りるとすぐ、南国の熱気が感じられた。東京都違って高層ビルは少なく、慌ただしい通行人も見あたらない。あるのは真っ赤な鳳凰木の花と、日に焼けて笑顔で一杯の現地人。

沖縄で最初に見学したのはひめゆり平和祈念資料館だった。戦争を経験したお年寄りから当時の地獄同然だった話を聞き、戦争の残酷さを改めて認識した。私達と同じような年頃の少女達が、迫られて戦場へ赴き、砲弾に直面して傷つき、亡くなった。戦争においてどちらが勝者だなどというものはない。見学を終えて心に残った考えは、心から平和を祈り、こんな悲劇が繰り返されないよう祈る、というものだけだった。

翌日は、当地で開催されたハーリーに参加した。十数分のトレーニングを経て、船をこいだ経験などない私達はライフジャケットを身につけ堂々と爬竜船に乗った。泳げない私にとっては、やはり怖いものがあった。特に乗ってすぐは船がひどく揺れ、叫びそうになった。それでも大会が始まると、恐怖心を忘れたように、ただ絶えずかいを漕いで、絶えずみんなと一緒に「一、二、一、二」と叫んだ。このイベントで最も重要なのはみんなが心を合わせて協力することだ。一つの方向に向かって、同じリズムを刻むのだ。なのでたとえ疲れても前の人の動きについていこう、足を引っ張るまいと努力する。その時、本当にみんなが一体になれたと感じた。同じ目標に向かって前進するあの気持ちは今でも記憶に新しい。結果として優勝はできなかったが、優勝より大事なものーー団結という収穫を得ることができた。

名残を惜しんで沖縄を離れ、次に訪れた場所のは大阪。最初に見学したのは適塾である。緒方洪庵先生が開設した私塾だ。ここから福沢諭吉、大村益次郎ら幕末の現代化や明治維新に巨大な貢献をした著名人たちが巣立っている。適塾の内部では当時の構造や施設が再現されており、建物は決して大きくはなかった。しかし、こうした有利とは言えない条件のもと、緒方先生は弟子達と共に多くの困難を克服し、研究と学問に専念した。適塾では一本の柱が一行の目を引いた。大小さまざまな傷跡があり、話によると当時の学生達がストレス発散のためにつけた傷だという。そのエピソードを聞いて、何百年も前の歴史上の人物との距離がぐっと縮まった。彼らにもストレスはあって、こんな方法で発散していたんだなあ。この柱のおかげで、歴史のこの部分はもう冷淡なものではなくなった。いきいきしたものになっている。

東京と大阪では、何度も電車や地下鉄で移動した。この小さな車内でも関東と関西のギャップが現れていた。東京の電車では誰もがほとんど黙っており、本を読んだり音楽を聴いたりしている。比べると、大阪の電車は少しにぎやかだ。三々五々の談話が耳に入ったが、もちろん他人の邪魔になるような音量では決してなかった。

今回の訪日で印象に残ったもう一つは、日本のリサイクル意識だ。日本はエコだ。誰もがごみの分別再利用を熟知しているというだけでなく、本やCDの再利用にもそれが見られる。日本でBOOK OFFを知らない人はいないだろう。中古の書籍、CDを専門に扱う書店だ。そこでは、新書と大差ないような古本がとても安く買えるが、中国にはこうした古書店がない。多くの本は一度しか読まれず、中国国内では単なる古紙として買い取られている。資源浪費の元だ。しかし日本では古紙になるところだったものが古書店を通じて資源になっているのだ。この点は学ぶに値する。

3.11東日本大震災が発生し、加えて原発事件も起きて、多くの人は日本がそれでも安全なのか疑問に思った。率直に言うと、訪日に出発するまでは、全く心配していないとは言えなかった。しかし、自分で経験してみないと分からないこともある。今回の訪日で、日本はいまだに美しく安全であると肯定できるようになった。私

は自分の体験をより多くの人に教えようと思う。街の至る所で「がんばろう日本、がんばろう東北」の標語を目にしたり、商業施設や神社にある募金箱を見るにつけ、日本人の団結力を感じた。それがきっと日本は近いうちに地震の影から脱却してまた奮起できる、と確信できる理由でもある。

わずか八日間を振り返ってみただけでも、まだたくさん素晴らしい記憶があって全ては書ききれない。いっぱいの期待を胸に日本を訪れたが、ずっしりと重い収穫を抱えて帰国することができた。改めて、この貴重な訪日の機会を下さった日本財団、日本科学協会と、随行していただいた日本科学協会のＡさん、Ｂさんに感謝を申し上げたい。この訪日での収穫は、一生の宝物として大事にします。

すべての人の心に花を－東京の旅紀行－
訪日で感じたこと（原文中国語）

貴州大学日本語学部４年　劉清

家に帰る汽車の中で、日本にいた数日間のあれこれを思い出しながら自分の感想を書いている。

2011年7月19日､飛行機は浦東空港を飛び立った｡私の小さな心の中には幾重ものさざ波が起き、日本へついに来たのだと言いたくなった。

＊初めての日本

感動と恐怖心、新鮮さと緊張、さまよう気持ちと期待を感じた。感動を覚えたのは、日本語学習者として、ついに他人や物を経由せず我が身で日本を理解できる喜びからだ。恐怖心の元は、日本が想像していたほど良いものでなかったらどうしようという気持ちだった。新鮮さは、日本へ訪れるのが初めてなので、何に対しても好奇心が満ちていたからだ。緊張していたのは、日本の環境にすぐ馴染んで旅程を楽しむことができるか不安だったせいだ。さまよう気持ちというのは、日本を理解しようと言ってもどこから入ったものか分からなかったということである。期待していたのは、少しでも早く日本の全てを感じられたらということだ。

＊日本の体験

・東京

高層ビルが林立した喧噪の中にも静けさが透けて見え、ところどころに美しさを感じさせる街、それが東京だった。尋常でなく賑わった街で自分を忘れることもできれば、沿道の静かな公園で心の平静を取り戻すこともできる、というのが東京の魅力だ。にぎわいの中に悠久の文化を漂わせる浅草寺も、気勢が雄大で、夜に光り輝く東京タワーも。電器店がひしめきあう秋葉原も、若者でごった返す新宿や六本木も、みな私を強く引きつけた。しかし、最も印象に残ったのは東京の通勤族である。それまで、通勤族は機械的で束縛を受けているものの象徴だとばかり思っていた。気力が振るわず、疲れ切ったイメージだったのだ。しかし、日本で目にした通勤族は違う印象だった。身なりはきちんとしており、気力も充実していて、言動には優雅ささえ浮かび上がる。道を歩けばおのずと風景ができあがっていった。思わず足を止めて鑑賞してしまった。彼らの姿をずっと見ていたくなったほどだ。上昇志向で努力家の彼らよ幸せな生涯を、と心の中で密かに祈った。

＊沖縄

美しい小島には尽きない魅力がある。たくさんのすばらしい記憶も残った。この地で初めて海を見た。水面が空とつながり、汚すことのできない青に溶け合っている。白い砂浜が、その青に飾りを添える最も美しいレースとなっていた。そして人々の嬉しそうな笑顔がその絵に躍動感を与えていたのだ。砂浜で風景を眺めていると、気づかぬうちにその人自身も風景の一部となる。人が見とれるほど景色は美しく、景色が美しいほど人は酔う。恍惚と陶酔の狭間で、自然と沖縄の美しさが記憶に刻まれた。当地では初めてハーリーに参加した。みんなの意気込みに満ちた顔、みんなが力を合わせて櫂を漕いだときの美しい光景、好成績を収めたときの喜

びの笑顔、どれも忘れられない。バスの乗り方を熱心に教えてくれるおじいさんとの出会いもあった。一つ一つの振る舞いや言葉にこまやかな愛情が満ちており、私達は深く感動した。沖縄を訪れることができたのは幸いだった。この地の数々の美しい景色、一人一人の沖縄の人々に感謝したい。これほどたくさんの、何年でも振り返るに値するすばらしい思い出をくれたことに。

＊大阪

大阪は尽きることのない活力をさらけ出して訪れる者を迎えてくれる。その懐に抱かれた人々も活力に満ち、元気が倍増するのだ。しかも幸運なことに、日本三大祭の一つである天神祭の日に当たった。夜、天神祭を祝って川辺で花火を楽しむ若者に出会った。個性あふれる若者に絢爛な花火の彩りが加わり、自然と美しい風景画になった。その景色を眺める私達も思わずうきうきした。同時に、大阪の人の率直さと洒脱さを強烈に感じた。

＊京都

京都に身を置くと、人の心も平静になる。古都の持つ文化のディテールに思わず感嘆した。続いて見学したのは金閣寺と清水寺である。普段から寺院文化には興味があったので、この両寺院の見学は期待でいっぱいだった。果たしてその名に恥じることなく、そこに身を置いた私の心はこの上なく慰められた。全ての悩み事が遙か遠くへ去っていったのだ。寺院はやはり心の休憩に最適な場所だ。

＊さようなら日本

時間が過ぎるのはいつも早い。あっという間に別れの時を迎えてしまった。いつか再会する時のために笑顔で日本を離れようと思っていたのだが、Ａさんが流暢とは言えない中国語で別れの挨拶をしてくれた時、耐えきれず涙を流してしまった。確かに、彼女たちは感動の思い出をたくさん残してくれた。この場で、今回の日本訪問の機会を下さった日本科学協会に感謝したい。訪日団の一行を親切に迎え入れてくださった大島美恵子会長とスタッフの皆様にも。ずっと面倒を見てくださったＢさん、Ａさん、ガイドの三名にも。私達につきあってこのすばらしい時間を送ってくださり、またこれほどたくさんのすばらしい思い出を残してくださって、ありがとうございます。この場において感謝以外の言葉を何一つ見つけられない。今後、きっと日本で見聞したことを生活や業務に生かしていこうと思う。中日両国の友情が末永く続きますように。

訪日の感想（原文中国語）

貴州大学日本語学部３年　**張明偉**

成田空港から東京へ向かう道中、台風接近の影響により、車外では激しい勢いの雨となった。車窓を流れ落ちる雨滴の向こうで、高くそびえるビル群に明かりがともるのが見え、現実のような嘘のような不思議な感じがした。ガイドさんは温和でユーモラスに東京の昔と今を語り、車外の嵐とはまるで関係がないようだった。

７月18日、つまり日本到着の前日に、日本サッカー女子代表がワールドカップで優勝した。菅直人首相が19日の朝、成田空港で凱旋したメンバーを迎え入れたという。3.11の東日本大震災以降、国内では少なくなっていたエキサイティングなニュースだ。ゴールキーパー海堀あゆみ選手は疑いなく日本の功績あるヒロインとなっていた。

3.11の地震発生からちょうど４ヶ月。東京の街をゆく感覚にはなにも以前と違う眺めはないように感じられた。人々の生活は何も変わらず整然としており、地震を連想させるものはといえば、街の至る所にある「がんばろう日本」や「節電中」といったポスターやら横断幕やらというくらいのものだった。

日本語を専攻に選んでから正真正銘の日本マニアになった私は、日本研究に関するさまざまな本を読み始めた。今回の日本旅行は、間違いなく、書中で目にした日本に自ら触れ検証するタイムリーなチャンスとなった。日本の歴史文化や風俗習慣については、それなりに分かっていても、日本の清潔な街頭、行き届いて心がこもったサービス、日本人の優れた素養、そして全体で調和し前に向かう雰囲気は、いずれも強烈な衝撃をくれた。

日本は時間や規律を守り、人々の集団意識と行動力が強い国である。日本の狭い道を歩いていると、にぎわって道が混んでいる市街地でもクラクションを耳にすることはない。明らかに、社会ルールを守る日本人の習

慣からすればクラクションなど完全に余計な代物なのだ。深夜の車通りがない交差点でも、人々は信号が青になってから横断歩道を渡る。歩行者と自動車が出くわすと、ドライバーが進んで歩行者に道を譲るのだ。人と車が互いに信頼しているこの社会では、気づかぬうちにそこへ溶け込むと、整列、謙譲、包容……静かさと幸せが唯一のメロディーとなって、人々はその静かさによって調和した社会の雰囲気を作っているのだ。同様に、電車の中では大声で話したり電話したりする人は少ない。人々は新聞や小説に目を落としたり、携帯電話で遊んだりしている。日本到着後、東京留学中の友人と電話した。友人はちょうど電車に乗っており、電話に出るなり「分かった、後でね」としか言わなかった。話し続けて他の人に影響するのを嫌がったのだ。明らかに、友人は目や耳から覚えていって、この静かな環境へ意識的に溶け込んでいるのだ。ただそのせいで、社会全体に冷たさと活気のなさも見えている。他人の邪魔をしないということは、コミュニケーションの機会を絶っているということでもある。

日本社会が全体として規律を守り静かだという他に、細部にこだわり礼節を尊ぶといったことも深く印象に残った。エレベーターに乗ろうとして、先に降りる人を通したとき、エレベーターがちょっと止まった時にまだ降りていない人がいると「すみません、お邪魔します」といった謝り方をする。街頭でも、商店でも、この国の隅々で、人々がしょっちゅう「すみません」と口にしていることに気づく。これは互いの譲り合いのためで、社会全体が和気あいあいとし、恨みを買うことも争いごとを起こすこともない。その他にも、レストランなどの公共の場所では、手提げを自分の席に置いて出歩いてもなくす心配はない。なくしものもたいがいは見つけられるのだ。互いに信頼しているこの社会では、何も心配なく他人を信じることができる。こうした信頼は、真心と進んで人を助けることが基礎になっている。

訪日中、日本科学協会から、日本財団の笹川陽平理事長が書かれた『隣人・中国人に言っておきたいこと』が一人一人に贈呈された。中日関係について述べられた本だが、表紙には「親日派でなく知日派になってほしい。両国の関係はもう「好き嫌い」のレベルではないのだから」とある。中日の相互理解については、まだ道のりは遠い。大多数の中国人は、いまだに日本人に対する認識が「戦時中の鬼軍人」レベルに留まっている。すぐ目や耳から入るアニメを除いて、中国人の日本文明に対する知識はとても少ない。「小日本」がいまだに日本人の代名詞なのだ。中日文化の相互交流は日本語専攻の学生に限ったものではなく、民衆全体レベルに普及するべきものである。

しかし、中国にはきわめて無価値な文化現象がある。日本、韓国、欧米を批判ひいては非難するだけで愛国者として守られ、反対に褒めようものなら外国に媚びを売る売国奴やその手先だとみなされかねない。これは中国人の実際にそぐわない尊大な心理を反映したものだと思う。祖国の醜悪な文化現象を批判するのは、国と国との違いをよりしっかりと描くためであり、それによって考え直し目を覚ますことは、この熱い土地への深い愛情なのだ。いわゆる憤怒青年が気の向くままに反日感情を煽るさまは、盲目で尊大な狭い心を示している。

思うに、いわゆる大国としては、経済レベルだけに留まらず、やはり穏やかな社会文化レベルのほうがより重要なのではないだろうか。立国には経済だけでなく、民族や国民全体の求心力と集団での行動力も必要だ。中国の GDP 総額が日本を抜いて世界第二位になったことは、あるレベルで誇れるものだが、文化的な素養と文明の面においては、日本とかなり大きな開きがある。ちょっとやそっとで追いつき追い越せるものではない。3.11 東日本大震災では、日本国民の整然としたふるまいや素養の高さが示され、正真正銘の文化と文明の強国であることを世界に示し証明した。政治的な要素を除き、日本社会の調和と団結は、私達が深く改めて考え、それによって目を覚まし奮起することに値する。「距離で言えば日本は近い。北京から東京まで飛行機 4 時間で着く。感情で言えば日本は遠い。歴史の傷がかすかに痛み、現実のいざこざは整理しようとしてもできない。発展で言えば、中国が日本と肩を並べるにはもっとたくさんの努力とコストが必要だ。」王錦思が著書『日本ができれば中国はもっとできる』の中でこのように記している。中国と日本がどれほど遠くても、これは確かに深く考えるべき問題だ。

訪日感想（原文中国語）

貴州師範大学 日本語学部 2 年　洪洋

成田空港を出る時になってやっと、憧れていた日本へついにやって来たのだと意識できた。目には日本流ファッションの若者、耳には流暢で心地よい日本語が飛び込んでくる。とどまることない期待と好奇心を胸に、8 日間の日本の旅が始まった。

＊東京

今回の日本旅行で最初の滞在先は東京だった。朝、早稲田や一橋といった有名大学から学生ボランティアが交流に来てくれた。ボランティア学生はガイドになって、浅草や日比谷などの観光地を案内して

くれた。また、それまで見たこともない生の海鮮料理をたくさん味わうことができた。たとえ生ものが苦手でも、以前とは違う新鮮みを体験しただろうと思う。夜はガイド達と分かれ、自分達で東京の冒険を始めた。夕闇の中、人々が慌ただしく行き交うのは銀座。原宿や六本木のにぎやかな人の群れ、そして昼夜を問わず走るバスと山手線。この時 MP3 で聞いていた『富士山下』が私の心境を一番よく表していたかもしれない。

この街には多くの期待を持った。二重橋から皇居をうかがい、トレンドリーダーの聖地でありアジアを風靡する渋谷へ。萌え美少女の空気に溢れ、電器店が林立した秋葉原から、高くそびえる東京タワーへ。自分が抱いていた印象とは違う奇妙な感覚がした。人々は慌ただしく行き交いながらも礼儀正しく、大通りは繁雑で入り組んでいても静かなものだった。現代化があるレベルに達すると、素朴な精神に戻ったような、都市に身を置きながら喧噪を離れるといった現象が起きるのだろうか？それとも、東京で暮らす人々にとって静かさは習慣であり秩序だという話のとおりなのだろうか－他者のために静かな雰囲気を作り出すと同時に、自分もそれを楽しむという。

＊沖縄

二つ目の滞在先は沖縄だった。

最初に見学したのは第二次世界大戦の慰霊碑－ひめゆりの塔である。この場所で、100 名を超える女学生と 10 数名の教職員が命を落とした。展示ホールでは史実の記録映画が放映され、戦争が人類に残した害を再現していた。外では鳳凰木の花が咲き誇っており、花開くことのなかった少女達の魂を乗せているかのようで、鮮やかで美しく濃厚だった。

午後は那覇市のハーリーに招待されて参加してきた。第二位を獲得できた。琉球大学などとの交流を通じて、この沖縄という青い海と空の間に浮かぶ真珠のような島々について理解と愛を深めた。

沖縄にいた二日間、夏川りみの『涙そうそう』をよく耳にした。沖縄の人々にとって、これまで見てきた戦争の残骸や受けた苦しみであれ、故郷や愛する人への思いであれ、確かに涙そうそうなのだろう。

＊ 京都

京都は、大和民族が美への理解に根を下ろして行った最も深い創造である。そう称えても決して過言ではない。

京都は、他の地とはっきり異なる風格を持っている。至る所に大和の時代からの気風を湛えた神社と盛唐の姿を見せる寺院があるのだ。表したかったのは故郷の山河にある日本の美しさの面影だ、と川端康成がノーベル賞の授賞式で述べたように。京都のあちこちで、そうした美しさが表れていた。中でも深く印象に残ったのは金閣寺である。三島由紀夫の『金閣寺』を読んだことはあるものの、その故郷の伝統美を追求する狂乱に近い思想についてはずっと理解できずにいた。金閣寺に足を踏み入れて初めて、震撼するほどの美しさというものを味わった。金閣寺には強烈な震撼を覚えたのだ。完全無欠であり、静謐で優雅。この黄金に輝きながら繊細さが透けてみる金閣寺を見学して、三島の「破壊によって永遠を求める」思想が理解できたような気がする。金閣寺の見学を通じて、この文学の鬼才の魂を垣間見ることができたのも、この旅行での収穫の一つだったと思う。

＊大阪

大阪は美食家にとって間違いなく最も期待してしまう街だ。考えてもみよう、大食漢がこの美食天国に訪れたら小躍りせずにいられるだろうか？私はそれほど飲食にこだわりをもたないが、それでも楽しめた。道頓堀に着いて、大阪が単なる食の都ではないと知った。ずらりと並んでいたのは、素晴らしいものに満ちた食べ物の屋台と店舗だったのだ。彩りも鮮やかな丹波屋から、狂暴きわまるタコの描かれたたこ焼き屋まで。伝統的な日本の鍋物から、アクセサリーのようによくできた回転寿司まで。道行く者の食指は動き、喉から手が出る。まして私達のような観光客はなおさらだ。

大阪滞在は一日だけだったが、にぎわう美食街や絢爛な花火大会を通して、東京よりも奔放な関西の風情を感じ取ることができた。
今回の日本旅行は僅か8日間だったが、中華民族とは異なる大和民族の風情を体験することができた。中日両国は古くから頻繁に交流があり、一衣帯水の隣国である。両国には現在たくさんの問題があるものの、両国が友好的共存の道を進み、より輝く未来へ向かうことを深く希望し確信して

がんばろう！ジャパン（原文日本語）

西南大学日本語学部4年　羅莉鴻

日本から帰国してもう数日も経った。近日写真を整理しながら、日本に滞在した毎日が次々と目の前に浮かべてきた。短いことが短いが、極素晴らしい旅だなあと思う。
初めてなので、日本のすべてに興味を持っていた、何でも自分自身で体験したくてどこでも自分の目で見たかった。毎日毎日興奮して気を引き立ててできるだけ多く経験してほしかった。だから、私は日本の独特な魅力をしみじみと感じた。で、一番印象深いことはやはり震災後の日本の姿だ。
出発するまで核輻射の影響で家族の皆さんがずっと心配してくれた。ところが、日本に着いた後、日本人がいつのままで出勤したり生活したりしている様子を見たら、自分も思わず落ち着いて安心してきた、そして、大震災に襲われた日本と国民全体は再建のために一生懸命頑張って生きていくような気がする。
東京タワーで見物した時、回廊でゴーヤが育ててある風景に気づいた。隣の掲示板を見てから分かった。地震に伴う大幅な電力不足で節電の必要性が高まってきた。こういう状況の中で、家庭から企業、自治体に至るまで、『緑のカーテンプロジェクト』という活動が発足された。朝顔やゴーヤ、キュウリなどのつる科の植物を育て、緑のカーテンを張ることで、直射日光が遮られて気温が下がり、夏の電力消費を押さえる目標を目指していることだ。
また、コンビニ―で買い物している時、店の入り口で無料で取れる節電団扇が設置されたことを見た。表で『節電の夏！団扇の夏！』というスローガンが書いてある、いわゆる『節電対作戦』が始まったのだ。これも以上のように節電のために行われることだ。このような風景は他の地方でも見られる。節電団扇は全日本に広められるということだ。
なお、町を散歩した間、『がんばろう、ジャパン！』のような応援する標語もところどころかけてある。こういうことを見たら、思わず感動した。そして、日本人の困難を耐える強靭な根性に感心された。
ところで、最近、日本の『なでしこ』と言われた日本の女子サッカーは2011年のドイツW杯で米国を破り、初の世界一になったことは全日本のトピックになり、災難を受けた日本に新たな活力を注いだ。
ということで、全日本ではどこでもだれでも元気を出して頑張っている。三年前、私のふるさと（四川省）も地震を受けてしまったせいか、現在の日本の状況はより深く理解できる。復興への道は長くて険しいかもしれないが、皆で力を合わせて頑張ればぜひ困難を乗り越えると信じている。
がんばろう、日本人！がんばろう、ジャパン！

私と東京（原文日本語）

南京大学日本語学部4年　紀文心

京都で一年間を過ごした私はこれまで、ずっと東京を京都の古都らしさを引き立てる装置として見ており、大都会の東京に京都の持たぬ性質を求めていた。まるで『お菊さん』の作家のロティが

日本に来る前に「日本」というオリエンタリズムに満ちた想像体を作り、日本に来てもその想像体から出なかったまま日本を観察したように、私も東京に来るたびに、メトロポリス、高層ビル、モダンなどのキーワードに飾られる「東京」という小さい球体を作ってそこに入ったきりで一度踏み出したこともなかった。その小さい球体のプラスティック製の膜ごしに東京を眺める時、膜に張り巡らされたキーワードがきらめいていたが、真の東京が膜の向うにぼんやりとちらめいていた。このように東京を超近代都市と位置づけたせいか、私は東京に来るごとに、お台場、六本木ヒルズ、銀座四丁目など近代的な部分のみに目を止め、そしてこれらの部分を見れば見るほど、東京を怖がるようにもなっていた。Tokyo という Kyoto と単にアルファベットの並び方の違う単語を見たら、Kyoto と同じように馴染みが感じられるどころか、そこに不安を掌る言霊がやどっており、その神様が絶え間なく私に圧迫を与えているようにさえ思われた。

今回笹川訪日団の一員として再び日本の土地に踏んだ時、日本科学協会から手厚い歓迎を受けて感動した同時に、これから向かう東京にはやはり不安と圧迫感を感じた。東京到着の初日、観光バスの中でアンケートが配られた。そこに「訪問の目標」の欄がある。車窓外のとめどなく続く高層ビル群のなした風景を目にした私は、「東京にひそんでいる歴史を掘り出す」と書いたが、この鉄筋コンクリートの世界を相手にして果たして目標が達成できるのかと疑わずにはいられなかった。ところが、翌朝ホテルの近くを散策する時に杉田玄白のお墓の石碑が無造作に道端に立っているのを見たとたん、これまでの不安も圧迫感も吹っ飛ばされた。今までずっと東京のことを歴史が蒸発されきった冷たくてしかも堅い金属空間だと思い込んでいたが、道端で歴史と意外に出会ってはじめて、ここは柔らかくて手触りのいいスポンジだということが分かった。このスポンジは歴史を水分のように吸い込み、体内で大事に保管し、自分の重さの一部をなさしめている。これを知ってから、東京のすべてがこれまでのステレオタイプから解放され、面白く見えるようになってくれた。私はこのスポンジの表を縦横に走る街道を歩き、行くところにキュッと「絞って」スポンジの小さい穴々から沸いてきた歴史に心が潤されてから、再び歩き出した。こうしているうち、私は東京に対して初めて馴染みを感じてきた。

この馴染みをいっそう深めてくれたのが桜田門への旅である。泊まるホテルの近くに愛宕山がある。夜になると、そこの蝉の鳴き声はあたかも池に落ちた小石のように東京のしんとした闇に波紋を投げ、愛宕神社に祭られる火の神様の保護を四方八方に伝えている。

この蝉の声に身を委ねているうち、ふとここは桜田志士の集合地であるとのことを思い出した。翌朝、「出世の石段」を登りきると、そこに「桜田烈士愛宕遺跡碑」がぽつりと立っている。151 年前の 3 月 3 日（3 月 24 日）、十八人の志士がここに集合してから大雪の中を桜田門へ向った。それを思うと、女坂を降りてから、私も桜田門へ足を運んだ。愛宕山から桜田門までは 1 キロで現代人がすたすた歩いたら 10 分しかかからない距離だが、当時天地を動かす行動（大老を暗殺すること）の道へ歩み出す志士達にとっては、さぞかし並々ならぬ距離であったろう。彼らはきっと自分の足跡を積もってきた雪の上に一個一個残しておきたかったのであろう。こう考えると、私も途中何度も足を止めずにはいられなかった。ようやく桜田門が目の前に姿を現した。その外門の高麗門の門前に立って、まず出発点の愛宕山方面を眺め、そして今日憲政記念館の位置にある彦根藩井伊家上屋敷跡の方向へ視線を注ぎ、最後この高麗門と大通りを一本隔てた近代を象徴する千代田区の高層ビル群に目が留まると、耳元に「この事件のどの死者にも歴史は犬死をさせていない」という司馬遼太郎氏の桜田門外の変への評価が響いてきた。私は、その評価を自分の目で確かめ、そして強烈な共感を覚えた。その時、東京は私の目には、もう発達した地上と地下の両世界でもって「Tokyo-phobia」（東京恐怖症）を絶えず生産している鉄筋コンクリーの怪物でなく、歴史愛好者にサプライズにつぐサプライズを与えてくれる宝島のような存在に見えた。私はようやく東京が好きになった。

東京を去るその朝、バスは羽田空港めがけて高速道路を走っていた。中にいる私が急にある曲を聴きたくなった。東京を舞台とした映画「ロスト・イン・トランスレーション」の主題歌の「シティー・ガール」である。

映画の最後、不安と戸惑いを胸にしながら東京へ新婚旅行にやってきた女の子がようやく新たな生活を迎える勇気を出して人込みに紛れた時に、この曲が流れてきた。その時、彼女の目に映った東京は、きっとこの曲を聴いている時の私の見た東京と同じように、可愛らしさを帯びているのであろう。こうして僅か三日間を通して東京に馴染みを感じられて本当によかった。そして、今回の笹川杯クイズ大会に参加した事をきっかけに、東京に関する知識を身に付け、更に優勝まで出来て東京に招待され、東京でこれらの知識を生かして今までのステレオタイプを捨てて東京を再認識できるようになったことは非常に恵まれていたと思う。

アツい日本（原文日本語）

東北財経大学日本語科４年生　金奉源

今回の日本旅行は自分の人生の中で初でした。なかなか素晴らしい体験をしながら日本に対する第一印象が体と頭の中に取り入れられたのです。

非常に勝手な自分だと分かりながらも、この第一印象をまとめようとして、三つのキーワードを探しました。それが、「綺麗」、「美味しい」、「有難い」です。

東京の成田空港に着陸した瞬間、雨中で「綺麗なあ」と思いました。汚れたところが探せなかったのです。私共訪日団はそこから本格的に旅立ちました。

初めて中国を離れるので、実家の両親と親友らに電話したかったのです。ホテルでフロントの係さんに聞いたら国際電話がかけられるとのことです。でも、料金が気になって、「どれぐらいかかりますか」と聞きました。すると、

「大変申し訳ございません。存じ上げませんので、調べさせていただきます。少々お待ちいただけますでしょうか。」

「… …、はい、… …、お願いします。」

係さんがあまりにも丁寧にお詫びをしたので、禁じ得なく話がつまずいたのです。しばらくしたら、

「調べましたところ、情報がございません。ご不便をおかけしております。大変申し訳ございません。」

「あ、わかりました。お手数でした。」

「本当に申し訳ございません。」

何回も頭を下げている姿勢に、自分はなんとなく世界一を誇る日本のサービス質が確かめられ、感心しました。

結局、コンビニに行ってネット上からテレフォンカードを買いました。ニコニコしている店員さんが案内してくれました。両親に電話がつながるまで、気心地よく済んだので、ものすごく有難いでした。当然受けたサービスについても両親と親友らに伝え、羨ましい目で見られました。

東京にいる間は、ボランティアの大学生さん達にガイドをしてもらい、楽しく過ごしました。京都、大阪など日本のどこに行っても、ボランティアが多かったので、無償に貢献する意識がなによりも尊敬すべきだと感じています。

沖縄では、天堂にしかないと思い切ってしまうぐらい美しい海を目にしました。素晴らしい眺めは、誰でも感動すると思います。国際通りの夜景は至上です。服などを売ってるのはヤクザの格好をしている若者ですが、却って偉いほど優しかったので、びっくりするだけでした。

回転寿司、ステーキと生ビールは絶品でした。今でも、それらを思い出すとすぐお腹が空きます。

大連に比べて蒸し暑い天気でしたが、日の下で頑張っている日本人達が、忙しい歩きで涼しい風をもたらしてくれました。

綺麗な日本、美味しい日本、有難い日本。世界のモンスタとして立ち上がれる力はすでに厚くたまっていると思います。

アツい日本でした。

日本科学協会の手厚い招待と他にも大変お世話になった方々に感謝します。おかげさまで、アツい日本を体験させていただきます。

どうもありがとうございます！

旅行で感じた日本（原文日本語）

東北財経大学日本語科４年生　朴光

待ちに待った日本科学協会の招聘旅行が７月19日ついに始まりました。旅行を控えて一ヶ月前からずっとうきうきとした気持ちで一杯でした。旅行が決まった時からスケジュールを見ながら旅行先のことも調べたり自分の心の中の日本をもう一度想像したりしました。

＊日本到着

大連から成田へ、中日両国は一衣帯水の近隣だと以前から言われましたが、今回のフライトでその言葉が実感できました。わずかの三時間でもう隣国の成田空港に到着したわけです。

私たちを心優しく迎えたのが日本科学協会の職員の方々でした。それから、おいしい夕食をいただいて直接ホテルに向かいました。暑い東京の天気に、周りの雰囲気も熱かったです。

＊身をもって感じた日本

８日間の旅行で一番印象深かったのは以下の二つです。

一番目は便利さでした。８日間の日程は日本科学協会の皆様の行き届いた配慮で便利になったところもありましたが、日本という国はそもそも人を基にして生活が便利になっているところとも身をもって実感しました。一例を挙げると、実は私は胃腸が弱くて、冷たいものでも熱いものでも食べすぎたらよくおなかを壊してしまいます。こんな私にとって、町を歩き回るのも大変危険な事でした。日本に来てはほぼ毎日見学や観光やショッピングであちこち歩き回らなければなりませんでした。どこでいつお腹が壊れてしまうか、ずっと心配でした。でも、幸い日本ではこの面で非常に便利でした。どこに行ってもトイレの案内看板は別の色で書かれ一目瞭然で、すぐ探せました。トイレの中もきれいで心地がよかったです。そして、トイレットペーパも必ず置いてくださって、本当にあり難いです。しかも、使用するには全部無料で感心しました。

二番目は日本料理でした。よく日本料理は見て楽しむものだと聞きましたが、日本に来て本場料理を楽しむ事ができて本当に幸せでした。小さなお碗ににょろにょろしたもずく、魚柄のお皿にきれいに乗せた鮨、それから今回初めて見たのが焼き魚を笹の葉っぱに包んで竹で挟んだ発想や竹のじょうごで豆腐をおろす発想、いずれにしてもすばらしくて感心しました。こんなに精巧に作られた日本料理は食べるにもったいない感じまでしました。

このような日本食には日本人の知恵と工夫が凝られているに間違いないでしょう。

８日間の旅行は本当に思い出にあふれる有意義で面白い旅行でした。これから、日本へ留学する事になりましたが、日本についてもっともっと勉強し、深く感じ取りたいです。

今回お招きいただきまして誠にありがとうございました。

一期一会（原文日本語）

東北財経大学日本語科４年生　安太紅

一期一会とは、一生に一度しか出会いのないものとして、悔しいのないように持て成せ、という茶会の心得です。

今回、日本の旅行で幸運に恵まれ、昔から名高い裏千家の茶会に参加することができました。笹川杯クイズ大会の準備段階で、私は日本の文化に関する本を何冊か読みました。もちろん、茶道も欠かせない日本文化であって、茶道に関する紹介も詳しくありました。でも、このように体験できたのは、初めてでした。茶道する際、茶室でもう一度一期一会という言葉を教えていただきました。茶会で見知らぬ人の集まりだとしても、地位の関係なく、職業の関係なく、お互いに気を配りながら、一生一度かぎりなので、楽しい時間を過ごそうということでした。

茶会は外国人向けに、若干変化を遂げていました。その原因は外国人はあぐらに苦手だからでした。茶会はいすに座ったままで、進むので、その前に、茶室を見学しました。４畳半の茶室の中の床の間には、季節の花が飾られていました。なでしこだそうです。ちょうど日本のなでしこ JAPAN が、ドイツワールドカップで優勝し、全国が賑やかになったところでした。床の間の気遣いから、日本人としての嬉しさがそのままつたわってきました。

その後、本番的な茶会が始まりました。まず、茶菓子を楽しんで、それから、お茶を点てました。きれいな着物に、巧みに作られた茶道具、先生のお点前を拝見しました。日本の抹茶は、中国のお茶より濃いでした。ちょっとなれていなかったところもありましたが、先生と楽しいお時間ができました。あっという間に、茶会がお開きになりました。

実は、初めて一期一会という言葉に接したのは、大学２年生の時でした。日本語の授業で先生が自分の一番好きな言葉であると、私たちに教えてくださったのです。中国でそんなに多い町の中で、みんな大連に集まり、それも同じ東北財経大学、同じ日本語学科に集まったのは、この上ないご縁ではないかと、先生がおっしゃいました。

この度、日本科学協会の皆様との出会いにしても、旅行一行の出会いにしても、日本の大学の学生さんとの出会いにしても、ガイドさんとの出会いにしても、正にその言葉どおりじゃないかと思います。今後、帰国したら、再度会えなくなるかもしれません。でも、一緒に国会議事堂を見学し、一緒に沖縄のハーリー大会に参加し、一緒に遊びながら、忘れられない思い出を作りました。

これからも、多くの人と出会うと思います。一期一会の旅は続くでしょう。旅の中で、自分を成長させながら、頑張りたいと思います。

訪日感想（原文中国語）

瀋陽師範大学日本語科４年生　姜琳琳

日本の政治、経済、文化などに関する知識はこれまで抽象的な認識だった。本から得たイメージばかりだったからだ。日本語を学んでいる縁で、日本という国について他の人より少しは多く知っている。そんな私でも、日本はいったいどういう国なのだろうとよく思う。日本科学協会による「東北地域日本知識クイズ大会」に参加したことで、このたび日本見学の機会を得ることができた。自分の目で日本を見て、本当に日本へ行き、近い距離から日本の経済や文化に触れることができたのだ。この八日間の

日本旅行ではたくさんの収穫があった。学識を増やすこともできた。本当の日本、生きた日本を目にすることができたのだ。なので、感想もたくさんあるが、ここでちょっと今回の日本旅行について共有してみたいと思う。

まず、日本の交通は非常に便利だ。よく知られているとおり、日本の新幹線は便利で速く、路線が四方八方に通じている。電車に乗れば東京をぐるりと一周することができ、ひととおり東京の景色を目にすることができる。国の経済発展には交通による働きが大きい。まさに飛ぶような速さの新幹線さながら、日本経済は第二次世界大戦などによる深刻な挫折から猛烈な勢いで発展した。

次に、日本人の環境意識は特に強烈である。東京でボランティアが工具を手に地面のごみを拾い集めている姿をいまだに覚えている。通りを歩いていても、ごみをポイ捨てする人は殆ど見かけない。これは日本人のこうした強烈な環境意識がなせるもので、この国では随所にごみの山が見られるということはあまりない。沖縄の海と空も深く印象に残っている。沖縄の海は天空のように澄み切った青さで、そこに身を置く人も絵の中の美しい景色のようになる。海辺には観光客がたくさんいたが、ごみは一つも落ちていなかった。日本人がこうした環境意識を持っているからこそ、日本はこんなに清潔で快適なのだ。

第三に、日本人は子供の教育を非常に重視している。私達が日本へ行った時は日本の夏休みで、多くの子供達は休みを迎えていた。空港のあちこちに、旅行へ出る子供が見られた。中学生、高校生、男子、女子。両親同伴の子もいたが、コミュニティ活動に参加している子の方が多かった。中国には、万巻の書を読み、万里を行くという言葉がある。知識の蓄積は充分にはほど遠く、また絶えず視野を広げる必要があるということだ。そうしてこそ、学んだことと知識とを結びつけることができる。子供達がコミュニティ活動に参加することは、自分の余暇を充実させるとともに、団体へのなじみ方、人との付き合い方を身につけることができる。より重要なのは、自らの学識と視野を広げることができるということだ。

もう一つは、江戸東京博物館の至る所で子供達の姿を見かけたことである。その子達には文化のエッセンスを吸収できるだけの知識はないかもしれないが、傍らの母親が簡潔な言葉で子供に説明すると、子供は真剣にメモをとっていた。ある国の民衆が自分の歴史的ルーツを知ろうと思ったら、自分の歴史的ルーツを知っておかないと展開していけない。日本でこうした情景を見られたことは、生きた授業になったと思う。わずか八日間で、日本人の子女教育に対する私の理解はそれほど深くないが、自分の目でこの一幕を見ることができとても感動した。

日本の科学技術の先進性、交通の利便性、国民の強烈な環境意識など、自分の目で見ることができたものは多い。この機会のおかげで、本当の意味で日本に触れ、日本に対する理解を深めることができた。一生大事にできる思い出になったと思う。今回の見学は、これからの仕事や学習に助けとなるものだと思う。また機会があれば日本を見に訪れて、日本人と日本文化にもっとじかに触れたい。これから、微力を尽くして中日文化交流に貢献できるよう願っている。

訪日感想（原文日本語）

南京信息工程大学日本語学部４年　憑秀英

七月二十四日の夜、大島会長は 「梅の花」で我々のために歓送会を開かれた。そうして私たちの訪日の旅はいよいよ終わりになる。

「梅の花」の壁に一幅の掛け軸がかけてある。その上に四つの字がある—　一期一会。

「一期一会」は日本語の中でよく見られる言葉だ。言葉によると、その中の深意は幕末の大老である井伊直弼によって提出したそうだ。ある人、あるいはあること生涯一回しか出会わないかもしれない。だ

から正直にこの時間を大切にしたほうがよい。

ここでは「一期一会」でこの旅を記述するのが一番よいと思う。

始まりから終わりまで総じて八日間だ。この八日間、日本の東京、沖縄、大阪、京都などの各地を訪問した。それで、日本を多方面から理解することもでき、多くの貴重な体験を得た。初めての飛行機、初めてのボート、初めて海と親しく，初めて異国の土地に立ち……すべては初回だからすばらしい思い出になった。それにずっと前から憧れたいくつかの場所にも足を向くことができた。たとえば、上野公園、国会議事堂、皇居、金閣寺などがある。私たちは一人ひとり奮い起こして必死でこのエキゾチックな雰囲気を感受した。これらの体験はきっと私たちの将来の成長への足がかりになると信じている。

沖縄では林ガイドの一言は私に深い印象を残した。海外では「三開」をしなければならないと彼女は言った。この「三開」はつまり心をオープンし、目を開き、お金を惜しまないことだ。両国間の相違を細かい心で観察し、比較し、その中から自分に益することを学ぶ。彼女はわざわざ日本人がコルク栓を使ってアスファルト道路を建設する例を挙げた。

私は今回のような活動に参加することができて、とても幸運なことだったと感じている。中日両国の差を分かると同時に日本語レベルの方面で自分と他人の大きいな差があることを認識した。同行のみんなとの交流が私に大きなインスピレーションを与えた。彼らは本当に「学問にはきりがない」、「学んで実際に役立てる」という言葉のいうように努力した。彼らのように勉強しつづけるだけで、日本語の進歩を求めることができると思う。

この場をお借りして、このようなチャンスを与えた日本財団と日本科学協会に感謝の意を申し上げる。これから笹川杯がますます発展すること、また更に活動がだんだん多くなり、拡大することを望んでいる。そうすれば、多くの人がチャンスに恵まれて、両国の相互理解がより深まって、両国の人民の友情も永遠続くと思う。

日本旅行で思ったこと—認識から見識へ—（原文中国語）

東華大学日本語学部３年　陳馳

日本には「旅の恥はかき捨て」という諺がある。普通、出先の不慣れな土地で恥をかいても知人に覚えられていることはないし、帰宅後に知る者もいないといった意味に解釈されている。しかし、文明開化に伴って他国への旅行も人々の視野に入ってきた。文化習慣が全く異なる国へ行くと、文化の違いから笑い話ができてしまうのは自然なこと。恥に悩むよりも、積極的に見聞を広めた方がいい。

外出には気まずく感じる事態も避けがたいものだ。女性専用車両に紛れ込んでしまった（同行していた女の子に連れ込まれた）ところ、社内に男性は自分しかいなかったとか。きれいな商品を目にして思わず撮影したら、店員に撮影禁止だと注意されたとか。日本語専攻の学生は、多くが小さい頃から日本のアニメを見て育ってきた。クイズ大会で入賞したのは、日本文化に関する「豊富な知識」である。しかし、結局それも本で知った認識や知識に過ぎず、日本社会を知っており、理解しているということは表していない。初めて日本を訪れ、本や画面で見てきた憧れのあれこれを体験してみて、カルチャーショックや違いを感じた。これこそ日本旅行で最大の楽しみだ。

東京に泊まった翌朝、ホテルのそばにある愛宕神社を早起きして観光しようと思い立った。私は敢えて裏門の坂道を選び、参道を登った。歩いているうち、一体の石像が祀られているのが目に入った。アニメで見た覚えのあるお地蔵さんに似ていると思ったので、そばを掃除していたおじさんに、これはお地蔵さんですかと尋ねてみた。おじさんは汗を拭いながら、知らないが多分そうだろうと笑った。日本には八百万の神が祀られて

いるので、日本人自身でも誰が誰だか分からないことがある。人々は通りがかると進んで手を合わせ、加護を祈るものだ。これは中国と違うところだ。中国の寺院はたいてい山や林の奥にあるが、日本の神々は都市化と一体になっており、いたるところでご神体、神社、寺院などが見られる。町のどこにでも嵌め込まれているような感じで、精緻、古風、質素、静謐な趣がある。

寺院と言うと、六日目に大阪でいただいた懐石料理を思い出す。僧侶達は心を清らかに保つ修行のために食事を減らし、温かい石を懐中に抱えることでひもじさを軽減するという。そんな出典を持つ「懐石」は、日本料理の精緻さを示す代名詞だ。口頭通訳の授業で関係する表現を暗唱したこともある。京都の懐石料理は季節感が溢れた芸術品のようで、箸を付けるに忍びない、というものだ。そういう前提があったので、懐石という素晴らしい料理を食べたいという願望は脳内でずっと膨れあがっていた。今回の旅でその夢も叶ったと言える。卓上に並ぶ料理はおのずと精緻なものだったが、誰の口にでも合いそうなものではなかった。あまりにあっさりとしていて、塩辛いものや辛いものを食べ慣れた人には、食べた気がしない。日本料理が「見る料理」だというのも頷ける。味覚を重視する中国人と違って、こうした料理は心をより食べさせるものかもしれない。

毎日の旅程は詰まっていたが、機会を利用して少しでも多く感じ取ろうと、晩の解散後にチームの何人かとあちこちへ足を運んだ。日本の道で最初に感じ、また何より深く印象に残るのは、頭の下がる清潔さだ。日本の大通りを目にする度「庶民の美しい娘」という言葉が思い起こされた。道路は作りが精緻で、秩序あるものだった。沿道のごみ箱も可燃物、不燃物、回収用ビン・カンの区分があり、ビンを捨てる時はシュリンクラベルとキャップまで分別して捨てる。こうした公共意識は社会全体の成長に伴って養われてきたものだ。反して私が暮らしている上海では、沿道のごみ箱に生活ごみと回収資源の分類があるのに、回収するものの定義が市民に周知されていないため、結果として分類も無意味になってしまっている。中国の都市は発展が早いが、人の発展はまるでそれに追いついていないようだ。

こうした違いを感じたのは、日本と中国の間だけでなく、「日本」と「日本」の間にもあった。中国は国土が広大で、南北で文化も風俗習慣も異なる。日本のような地域でもギャップは大きい。日本人の先生と話した記憶では、カレーに入れる肉の種類が関東と関西では違うのだそうだ。ここからも文化の違いが少しは伺える。

今回は幸いなことに、東京、京阪、沖縄という三つの文化圏を訪れることができた。確かに、風土が人に与える感覚はかなり違う。日本の街角で道を尋ねると、恐らく東京の人が一番冷たいと言われるが、確かに私も無視された経験がある。大阪の古本屋で道を尋ねたら、カウンターにいた若い人が店を出て地図を見ながら詳しく手振りで教えてくれた。大阪の地下鉄車内では大声で喋る人達がどこにでもいた。中国のうるさい車内になれている私でも耐え難いぐらいだったが、東京の車内では、喋るといっても、ひそひそ声ばかりだった。

沖縄は、また違った景色だった。ハーリー（爬竜船）大会を案内してくれた沖縄のおじさんたちは、焼けた肌が友好的だと印象に残った。首里城を見終わったとき、アメリカ人とおぼしきボランティアに呼び止められた。かなり流暢な中国語で、首里城について感想や意見を尋ねてきたのだ。色の黒いアメリカ人が、沖縄で、中国語で私達と喋るという特殊なコミュニケーションは、沖縄は違うのだという気持ちを醸し出してくれた。東京などに留学している友人や同級生は多いが、彼らの印象は総じて日本人に近い内気なものだった。それが焼き肉大会で出会った沖縄に留学中の中国人学生は、まるで異郷で知り合いに出会ったかのようだった。親切にグラスを持って出身地を尋ねに来ては、乾杯するとビールを一気飲み。中国男子のさっぱりした気質そのものだった。

実際、日本と日本人も本で読んだような教科書的な特徴を持っていたわけではない。文化は国によっても地域によっても異なる。あらゆる方向から理解しないと、日本や日本人を妖怪か神のように捉えてしまいがちだ。実は日本の地下鉄も秒単位の正確さではなく、日本にでもごみ一つ落ちていないところばかりではない。日本の車内にも騒いだりはしゃいだりする光景は見られる。日本人でも顔を合わせたら話してくれることもあるし、

値札を貼り間違えることだってある…今回の旅に参加できて本当に幸いだったと思う。東京、沖縄、大阪、京都を訪ねて、脳内の日本と日本人の印象が生き生きとぴちぴちとしてきた気がする。単一で一面的に、日本がどういう国で日本人がどういう人々なのかを機械的に区分するのではなく、自分で学んだことを自分で感じ取ったことと結びつけ、心の中に生き生きとしたイメージが構築すること。本と七日間の訪日ではとうてい完成できないことではあるが。

いる。

訪日感想（原文日本語）

貴州大学外国語学院日本語学部４年　鄧嬋

貴州大学の鄧嬋です。このたび西南地域笹川杯クイズ大会に参加したきっかけ、日本を八日間訪問する機会を得ました。すごくうれしかったです。日本科学協会及び日本財団の先生たちはわざわざ私たちのためにこんなに素晴らしい思い出を作ってくれて、心から感謝しています。

日本で一番印象深いのは街の綺麗さだと思います。東京にいった間、朝６時から二、三人と一緒に東京タワーとか皇居とかへ散歩に行きました。静かで綺麗な街を歩いて、そよ風が頬を撫でながら、なんか自分の悩みと迷いも消えていったそうです。東京タワーの下に風鈴のなり声を聞きながら、自分はいま日本にいるなあと感嘆してやみません。二重橋の前に立っていると、本当に日本にいるなあ、東京にいるなあ、また不思議なような気がしました。

今回日本に行ったのは本当に良かったと思います。皆さんと出会ったのは本当に幸せだと思います。勿論、日本に行く前に皆さんはお互いに知らなかったです。しかし、本当の日本に触れたい、日本の事をもっと知りたい、日本に行きたいという気持ちは同じです。だからこそ、中国の四方八方から成田空港に集まりました。それから、早稲田大学と慶応大学の学生さんとの中日交流も楽しかったです。おかげで、秋葉原で自分が好きなカメラを買いました。それに、東京タワーの展望台に上がって、東京全体を眺めました。本当にきれいでした。

東京だけではなく、沖縄の海とハーリー大会、京都の金閣寺と清水寺への見学も楽しかったです。八日間は短いですが、私にとって、一生の宝物だと思います。これからチャンスがあれば、ぜひ日本に留学したいと思います。

大震災後の日本への旅（原文日本語）

四川外国語学院日本語学部４年　賈紓婧

この度、日本科学協会のお招きに応じ、日本に訪問させていただきました。僅かの八日間でしたが、充実で楽しい日々を過ごさせていただき、本当に心から感謝いたします。この感激の気持ちを込めて、訪日の感想を拙筆で記録したいと思います。今回は「美食」、「美景」、「美人」という三つの部分に分けてお書きしたいと思います。

まず、この八日間はおいしい日本料理をいっぱい食べさせていただきました。東京で有名なバイキングのお店にも訪れましたし、北海道に行かないにもかかわらず、本番の北海道料理も東京で食べました。沖縄でゴーヤーチャンプルなどヘルシーで特色のある沖縄料理を満喫しました。京都でも大阪でも関西の美食に感動しました。普段特にカロリー摂取に気になる私でも、ダイエットする意欲を捨て、おいしい和食を食べながら、「日本料理最高！」と感じずにはいられません。

そして、日本の景色にも感動しました。東京で日本人の大学生と一緒に有名なデート・スポットである東京タワー及びお台場にも訪れ、若者文化を体験しました。秋葉原で一番有名なメイド喫茶にも行き、「御宅文化」も味わいました。また、浅草で江戸時代の庶民的雰囲気も実感しました。京都で金閣寺へも清水寺へも参拝し、「和」の文化に感心しました。

ところが、一番心を奪われたところは沖縄の海です。豊見城市で海を見たとたんに、嬉しい気持ちに耐えられず海に向かい、叫びながら走ってゆきました。透き通った水や柔らかい砂をこの足で実感した際、見渡す限りのない海を眺めた時、海の匂いに滲まれた新鮮な空気を吸うおり、「自然が本当に美しいなぁ」と感動していました。

最後は「美人」について述べたいと思います。ここで説明しておきたい「美人」は外見が美しい人より中身が美しくて素敵な人なのです。緒方洪庵がとてもすばらしい「美人」だと私は思います。緒方洪庵の開かれた適塾に訪れた時、その時代の話を聞き、適塾にある実物を見ながら、緒方洪庵の素晴らしい人格に感心しました。また、大島会長をはじめ、Ａさん、Ｂさん、Ｃさんなど日本科学協会からいらっしゃった素敵な方々が世話してくださったおかげで、私たちは今回の旅を満喫しました。

「美人」の話をもう少し広げておきますと、今東日本大震災に関心を持たれる方々及び節電で頑張っている方々が皆偉い「美人」だと私は思います。沖縄でハーリー大会に参加した時、うちのチームが一丸となって最後まで必死に船を漕いだことは今でも頭の中ではっきり覚えており、思い出すたびに感動の涙が溢れます。今回は東京でも大阪でもいろいろ節電の看板やＣＭを見、「東北、頑張れ！」というスローガンがたくさんの車のガラスにかけられているのを見て、本当に心を打たれました。この強い団結力こそわれわれが一番必要なものではないでしょうか。この団結力を大事にしている方々こそ一番美しい人ではないでしょうか。

以前一年間東京で留学していましたが、震災後の日本に来るのが今回は初めてです。来る前に「日本はどうなるんだろう」ととても心配していましたが、日本に来ていろいろ見て、「余計な心配だなぁ」と自分のことを笑いました。日本はいつもどおり整然と秩序立っています。しかも、国民が一層一丸となり、団結力で心強くなったでしょう。これは日本しかできないです。このような特別な頃こういう特別な国に行かせていただくことを光栄に思います。今回得た素敵な経験も見た風景も宝物として大切にしてゆきたいと思います。

小さいものへの執着（原文日本語）

東華大学日本語学科主任補佐　李薇

日本民族は独自の魅力的な文化を持っていて、特に小さいものに対して特別な感情を有するのがずいぶん昔から分かっているが、今回 7 月 19 日からの八日間の旅でその小さいものへの執着心の強さはしみじみに感じ取った。

昔話の一寸法師や桃太郎、近代の一休や桜子や名探偵柯南などの人気人物から小さくてかわいい、小さくて優れる、小さいけど大に勝てるという精神が読み取れる。現実世界に至り、さまざまな技術発明が日本人の小さいものへの執着を一番表していると言えよう。ウォークマンをはじめ、世界中最小のハードディスク、人形ロボットや一番薄いテレビなど、日本人がより小さい、より精緻、よりよいものを追求し続ける心は、社会発展の原動力と言っても過言ではない。今回訪日の旅で、目に触れた日常生活用品の小さくて精密さは言うまでもなく、空間から建物を小さくしながら有限な空間を最大限度に伸ばす日本人の気配りにすっかり敬服した。

東京で泊まっていたホテルはにぎやかな新橋にある。朝起きて、正門から出て、右手へ曲がるとすぐ愛宕神

社の看板が目に入った。案内図に従い、3階のエレベーターを出ると、左側はNHK放送博物館、まっすぐ目の前に緑に覆われたのは神社だった。敷地は広くないが、地面ではなく、上の空間を巧みに利用し、しかもこんな繁華な都心部で作られたのに大いに驚いた。五分で回れる境内に福寿稲荷神社、太郎坊社もあった。夫婦二人で維持しているようだが、立派な神殿や趣きのある池、出世の石段などが揃っていて、隅々に手が込んでいるような気がした。石段のそばに桜田烈士愛宕遺跡碑が無造作に立っていたのにも気が付いた。こんな小さい神社に、限られた空間に豊富な歴史、宗教信仰が静かに潜んでいるのはなんと面白いことであろうと思うたびに万感胸にせまる。

近代的な建物もそうだ。その日の午後、学生につれてもらって秋葉原のアキバというアニメグッズショップに入った。小さくて細長い店だが、奥へ行くと、意外なことに8階もあった！本棚に漫画の本が整然とたくさん並んでいるばかりではなく、曲がり角や階段の手すりの下や階段の周りの壁さえ、つまり客の目のいたるところまで彩色のポスターがきれいに貼ったり置いたりしてあった。エスカレーターを見つけるのも一苦労した。というのはその扉自身も巨大なポスターとなったのでしっかり探さないと通り越しやすいからだ。開いたので入ろうとしたら、その中の三面の壁も一枚の宣伝ポスターであった。まさに店に入ったとたん、もうアニメの世界に入り込まれた。空間を上手に利用したとしきりに感動した。これは日本ではけっして極端な店ではないと思う。むしろあらゆる店、さらに電車内など狭いところで追い求める有限な空間で無限な可能を作り出そうのではないだろう。

いま、東京見学を思い出せば、広いところが快適だと思っていた私に一番インパクトを与えたのはやはりこの小さいものへの執着であろう。

感想文の最後に、大変お世話になった日本科学協会の大島会長、Ａさん、Ｂさん、Ｃさんに衷心より感謝申し上げます。おかげさまで、日本の美しさ、穏やかさ、日本人の賢さなどを再び感じ取った。

訪日感想文（原文日本語）

山東大学日本語学科教師　胡勇

日本科学協会の大島会長をはじめ日本科学協会の皆様、関係者の皆様のおかげで今回の訪日の旅がとても有意義で思い出深い旅となりました。ですので、感想文の最初のキーワードといたしましては「感謝」という言葉にほかならなかったのです。クイズ大会などでの苦労はもちろん、今回の訪日の旅だけても、事前の企画、準備それに諸連絡、団体が日本についてからも関東から沖縄、そして関西へとずっと引率していただきました。膨大な量の仕事を綿密にしていただいたからこそこのような素晴らしい旅ができたといっても過言ではないのです。お茶１本からお食事の席順に至って細やかな心遣いとご配慮にひたすら感心しつつ、感謝の気持ちは今になってもわたくしの心から溢れ出ようとしています。本当にお世話になりました。

合わせて8年以上も日本に暮らしていた私にとっては今回の旅は懐かしく感じると同時に新しい発見も多かったのです。まさに「温故知新」という言葉通りのものでした。史上稀に見る大震災、津波と放射性物質拡散といった最悪状況から立ち直った日本は依然として秩序よく、清潔で、美しい姿でいました。この強さはほかではなく日ごろの国民教育と伝統がその源にあると強く信じております。このような精神的な強さ、どんな状況に置かれてもしっかりと秩序を守ろうとする意志、自信から生まれた「他信」、負けず挫けずという信念など皆みごとに震災から立ち直ることに直結しました。もちろん国の具体的な状況が違うが、中国人のわたしたちにとってはこの中から学ぶべきものがきっとあると思います。これらを見つけ出し、学生諸君に気づかせることはわれわれ教師としての責任だと思いました。確かに今回訪日できた学生たちは皆日本いついての知識が

豊富だからこの貴重なチャンスをいただいたわけで、日本をよく知っていると言えよう。だが、「知識」という言葉通りに、「知る」だけの「知」のみでは不十分で、自分の身でもって感じ取った後初めてできる「識」、いわゆる「識別」の力も非常に重要だと思います。この「識別」の対象となるのはただの狭義の「知識」だけではなく、より広義的な科学・技術、経済、文化、歴史、社会、心理などを含むすべての自然的・人文的分野にわたるものとなる。自国と日本との差異を感じた瞬間から、「なぜ、だから、わたしとしては、中国には」というように正誤を問わず自分なりな考えを持つことが重要であろう。こういった考えこそが真なる中日交流と友好の原動力と立脚点になるのだと私が信じております。アイデンティティをお互い認めつつもその融合と発展を望むことで地球村の平和と発展ができるのであろう。今度行った沖縄の文化に対する理解が深めることにつれて、ますますそう思いました。

感想文を書くつもりでいて、ついつい論文ぽくなってきましたが、これも今回の旅に無造作に潜んでいる深みでもありましょう。もし今後チャンスがありましたら、大島会長、尾形理事長や顧様などの専門家、有識者、そして日本の若い大学生の皆さんと友好と交流についてじっくりとお話したいと心から望んでおります。

感想文の結びにあたり、日本科学協会の皆々さまに再び深く感謝いたしたいと存じます。私とも今後の日本クイズ大会をはじめ、さまざまな友好交流イベントに参加させていただき、微力でありながらも中日友好に尽力させていただきたいと存じます。

美ら（ちゅ）日本をにふぇーでーびる（原文日本語）

東北財経大学国際商務外語学院日本語科教師　蒋云斗

「美ら日本をにふぇーでーびる」について

「美ら」と「にふぇーでーびる」は沖縄で勉強した「島言葉」です。すなわち、沖縄の方言なのです。「美しい」を沖縄の言葉で「美ら」と言い、「ありがとうございます」を沖縄の言葉で「にふぇーでーびる」と言います。

＊日本との絆

今回、訪日したとき、よく「なぜ日本語を選考したか」と聞かれました。私自身もよく自分に聞きました。はっきり答えられないのですが、やっぱり「絆」でしょうか。

私の出身地は中国東北部の遼寧省です。遼寧省は早くから日本との関係が非常に深く、今でも日本人が建てた建物が数多くあり、日本からもたらされた文化があちこちに残されています。私は子供の頃、身近かな老人達から、嘗て生活を共にした日本の庶民の話を聞き、それまで抱いていた日本・日本人に対するイメージとは別のイメージを持ちました。そのため、日本語・日本文化に対して強い関心を抱くようになり、いつか自分の目で日本を見たいと思い始めました。大学入学後はためらうことなく日本語を専攻しました。そして、日本人の先生について、日本語や日本文化について学べば学ぶほど、実際に現地へ行き、生活しながら日本語を学ぶとともに、その社会・文化への理解を深めたいという気持ちが強くなりました。そこで、日本留学を決意したのです。幸いなことに、大學三年生の時に、選ばれて交換留学生となり、2005年10月から福井大学に一年間留学することができました。この間、大学における交流活動はむろんのこと、日中友好交流協会や県国際交流会館が主催する各種の活動に参加し、多くの日本人の友人ができました。同時に、大学の先生の熱心な指導により、単に現在の日本や日本文化について知るのみではなく、今日の日本を作っている過去の日本の文化や言語についても学ばなければならないことを痛感しました。すなわち、古代日本における中国古典文化の受容には長い歴史があり、日本古典文学にはその精華が現れていることを知りました。そこで日本江戸文学における

中国古典文学の受容という研究課題を選び、これについてさらに深く研究するために再度来日し、福井大学の大学院に入学した。日本で過ごした三年は、自分には到底どれほど影響を与えたのか、今まではっきり言えません。その三年間、私は専門知識を身につけたとともに、精神が鍛えられ、磨かれました。日常生活と研究生活を両立すること、誰にも頼らず生活に面する過程には、独立して決定をすることがだんだんできるようになりました。留学生活は私の本当の成人式です。留学経験は教壇に立っている私の一生の宝物になっています。留学時代、日本の奨学財団の奨学金をいただき、日本人の先生の熱心な指導をいただき、周りの日本人の友人の世話になりました。だから、日本というと、やっぱり「ありがとうございます」すなわち「にふぇーでーびる」です。

＊二年ぶりの日本

交流の広場—東京。東京での色々な歓迎会と懇親会を通じて、日本科学協会の方々、日本財団の方々及び日本の名門大学の大学生と交流できました。交流内容というと、クイズ大会に関するのは無論のこと、日本語の勉強、日本文化、中日関係にも及びました。皆さんは言語や国籍の違いを超えて、自由自在に交流して、その場面、そのときの気持ち、一生でも忘れられません。

世界遺産の旅—京都。京都見学はただ半日だけでしたが、金閣寺と清水寺この二つの世界でも有数の名寺院を見学しました。清水寺の舞台に立った瞬間、本当にその舞台から飛び降りるつもりだった。再び輝かしい金閣寺と素晴らしい清水寺を作った日本人の先人の知恵に感嘆した。エピソードですが、私は清水寺の奥にある地主神社での恋占いの石で、自分の未来を占ってみて、幸せな恋を願いました。目を閉じたまま、向こうの石まで、まっすぐで行って、向こうの石をたたいて、鳴らした声を聞いた私はすごく幸せでした。

大阪蘭学の源—適塾。大阪は何度も行ったことがありましたが、適塾は初めてです。適塾は緒方洪庵という蘭学者が大阪に開いたもので、幕末から明治維新にかけて活躍した福沢諭吉などの人材を多く輩出し、現在の大阪大学と慶応義塾大學の源流の一つとなっています。こんな有名な適塾を見学したとき、教育者でもある緒方洪庵がその広いと言えない部屋でまじめに研究して、熱心に学生諸君を指導した場面は目の前に浮かんだようです。そんな緒方洪庵を支えたのはきっと真理への探究心と学生への愛でしょう。真理への探究心と学生への愛は今新人教師の私にとっても、最も重要なものです。

美ら姫百合—沖縄。沖縄についた日、沖縄県にあるひめゆり平和記念資料館を見学しました。同行の学生達より若い年齢の少女が何も知らずに戦争に直面し、ほとんど命がなくなってしまいました。今の私たちは平和だからこそ、楽しく毎日を送っています。平和社会生まれ、平和社会育てた私は平和社会で暮らしているから、その資料館の資料を見ても、戦争の残酷さが想像できませんでした。美ら姫百合少女たちのことに感動したと同時に、なんとなく戦争が怖い感じがしました。姫百合の塔の記念碑の前に立って、この世界では絶対に戦争しないよう願いました。

＊最後ながら

この度、日本科学協会のお招きをいただき、日本各地を参観訪問する機会を得まして、日本の多彩な文化を体験できまして、沖縄の方言まで勉強しました。誠に嬉しく存じます。そのうえ、私たちが初期の訪日目的を達成し得ましたのは、大島会長をはじめとする協会の方々の心のこもったご接待と、細やかなご遠慮のたまものにほかなりません。この場を借りて、感謝の意を深く表したいと思っております。皆様、「にふぇーでーびる」。

訪日の感想（原文中国語）

貴州大学外国語学院日本語学部教師　李麗

懐かしい日本を五年ぶりに訪れた。日本に足を踏み入れると、心に温かいものがこみ上げる。この地には心から愛する先生、懐かしい日本への思い、すばらしい思い出があるからだ。

今回は、日本科学協会の招きを受け、南西地区の引率教員として八日間の訪日に参加した。この上なく光栄に感じる。旅行前、日本を史上最悪の地震と津波が襲った。身内や友人達は今回の日本旅行をやめるように勧めてきた。私も多少は心配していたが、それでも私は日本に関心を持っているし、私の運命や仕事とも密接に関わるこの国の被災後の状況を見ようと思ったのだ。最終的に、この貴重な機会により予定どおり日本を訪れることを選択した。日本の地に足を踏み入れると、日本国民の平静さと整然とした暮らしぶりに嬉しさを感じた。私は心の中で「がんばれ日本、すべては過ぎ去るから。皆さんはすごい！」とつぶやいていた。帰国後に身内や友人と会うと、彼らの開口一番は「日本はどうだったの？」だった。「日本はやっぱり強い民族だよ。このぐらいのダメージではくじけない。本当に日本を分かっていないようだね、機会があったら日本を見に行くべきだよ！」と答えた。

そう、中国人であれ日本人であれ、一般大衆の相互理解はとても限られている。中日両国民の交流や理解のための事業拡大を担えるのは私達――日本語教育と文化事業に従事する人間だけだ。自分の責任と使命を感じる。

日本の大学生との交流で、中日友好が長続きする希望と未来を目にすることもできた。私達南西地区チームは早稲田大学、一橋大学の学生と交流した。彼らの丁寧で親切な説明、面倒見の良さ、そして中国文化に対する興味の強さ、中国学生とのうち解けた交流、みんなが嬉しそうに笑顔を浮かべているのを見て、この上なく安心と暖かみを感じた。彼らが私達両国民の友好の望みを引き継ぐからだ。彼らはきっとあの日のことを子供や孫に語り継いでくれるだろう。なんとすばらしく感動することか。

日本の大学生だけでなく、日本科学協会の大島美恵子会長も親切で、わざわざ東京から大阪に足を運んで集いに参加し、話をしてくださった。短い時間ではあったが、教員と学生の全員にとってぬぐい去れない暖かさだったと思う。彼女からは、中日友好事業にかける者の中日の若者に対する心からの配慮と、中日友好事業への執着が感じ取れた。この暖かみを胸に、日本国民とずっと手を取り合って未来、予知できない未来に向き合えるよう、未来が幸福であろうと苦痛であろうと、共に向き合って幸福を共有し、苦痛を分かち合えるよう心から望んでいる。

私にとって四度目の日本だったが、この一生の記憶の中で、日本という国はきっと私の命の重要な一章である。日本は新しい生活を教えてくれるし、違った視野からこの世界を見せてくれる。中日両国の代々の恩讐を評価して、更に恩義と身の回りを温める世界について教えてくれるのだ。

八日間という短い訪日だったが、再び暖かみを感じられるものだった。

日本の皆さん、ありがとう。